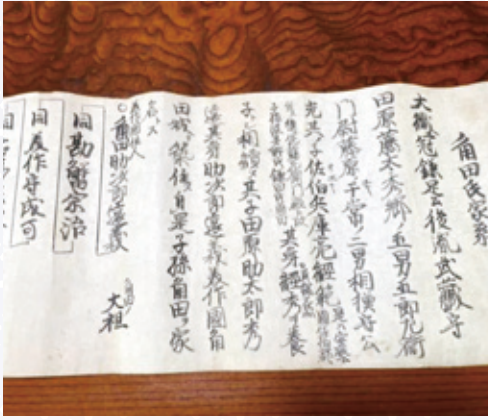


角田氏余話

鎌倉時代に薪森原一帯（薪郷）を領地としていた角田弥平治（弥平次）という人物については、以前ここで紹介しました（平成二十九年一・二月号「美作角田氏の興亡」）。

角田弥平治は、後鳥羽上皇が鎌倉幕府の執権・北条義時の討伐のために兵を挙げた承久の乱（一二二一年）に幕府方として出陣して功績を挙げ、恩賞としてもらった薪郷の地に関東から移住してきた幕府の御家人です。以来角田氏は代々この地を治め、室町時代には幕府の將軍の家来（奉公衆）としてその名が出てき

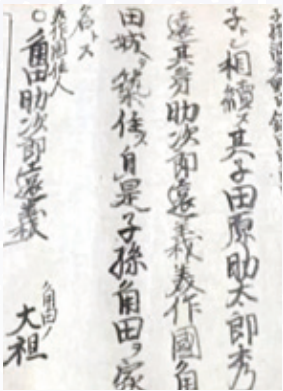


会津の角田氏家系図

ます。戦国時代には美作で角田氏の名が出てくることはなくなりますが、薪森原には角田の姓を刻んだ江戸時代前期の自然石の供養碑が残っており、角田一族は江戸時代まで薪郷に存続していたことがわかります。

美作の角田氏についてはこの程度の記録しかわかりませんが、令和五年三月、福島県会津若松市在住の角田様から「会津の角田氏の先祖が美作の角田氏である」との連絡がありました。会津の角田様一行は三月末に福島県から来町し、祖先のゆかりの地である薪森原一帯を散策されましたが、後日いただいた家系図の写しを拝見すると、そこには確かに美作の出身であると書かれていました。

会津の角田氏家系図によれば、平安時代に下総国（現茨城県）で反乱



角田助次郎遠義の記述部分

を起こした平将門を討つた藤原秀郷の五男・藤原千常の子孫が安芸国佐伯郡（現広島市）に移住し、その子孫・田原助次郎遠義が美作国に移住し角田城を築き、それ以来「角田」姓を名乗ったとされ、この角田助次郎遠義を角田氏の初代としています。

その後、十三代にわたり角田城に在住し、南北朝時代（十四世紀）の角田秀義の代に南朝方の総大将を務めた新田義貞に従い、越前国（現福井県）で新田義貞が敗死すると会津に落ち延びて同じく新田義貞に属していた蘆名直盛を頼り、それ以来会津に居住することとなります。その子孫は戦国時代には会津の大名・蘆名盛氏に仕え、最後は蘆名氏に属する河原田盛次に仕えた角田勝蔵で系図は終わり、天正十八年（一五九〇）に書き記したことが書かれています。

この系図には、「美作国」と書かれているだけで鏡野町の地名は出て



江戸時代の角田氏の供養碑（薪森原）

きませんが、美作国内で角田氏といえば薪郷の角田氏になりますので、「角田城」とは、現在の郷公民館の場所にあつたとされる角田氏の館跡のことを指すのでしょうか。

美作の角田氏は、「承久記」等の記述から元は関東地方の武士で、上総国角田郷（千葉県）の出自であることはほぼ間違いないと思われますが、会津の系図は安芸国から移住したとされています。これは、系図作成当時に仕えていた河原田氏が藤原秀郷を祖とすることから、主家と同族であることを意識して創作されたということも考えられます。系図に「角田弥平治」の名がないことから、会津移住以前の家系は不明であった可能性もありますが、美作の角田氏は南北朝時代は北朝方に属し、室町時代も幕府の家来として続いているので、会津の角田氏は本家と袂を分かち南朝に属した角田一族の分家とも推測できます。

いずれにしても、遠く東北の地に鏡野町域を出自とする一族の子孫が、中世から現在に至るまで続いているというところに歴史の悠久を感じずにはいられません。

参考：「郷の村誌」地方別武將家一覽HP
協力：角田徹、角田英毅、河原田宗興

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下
電話（0868）54-0573